門三味線

（一）

「薫る袖垣中もよく
ほたけ祭の取々に」

何うぞとお言ひと教へられてお重ねしたる手に、買つて貰ひし籠の螢の光うつくしく、過行く橋の上の町よりは夜風涼しきにおどろきて、消えうも知れぬと袂へ隠したる幼心、尊やいつも子供にてとおもへど、伸びる春丈は衣といへども縮めはならず、塵のたゝざる日も夜もなし、持ちやう一つの心に神はありながら棚にまばゆき燈明かゝげて、守らせたまへと形の神をたのむ果敢なさ、ながめは初花も咎のまゝ開かずば、だまされて誇る色香の末、雨によごるゝこともなし、這ふまい立つまい歩むまい、這ふとも立つとも歩むとも、六つか七つか八つを限りに何故人は死なぬぞ、それ其處に笹があるサッサと逃げたが謔のはじめ、年ゆゑ汚るゝ浅ましの身は、うまれたが是非なの世にこれも因果か。又濱様の來て下された、早う仕やといはれて立出づるはお筆とて、土一升金一升の古句も今猶、通町の紙問屋がひとり娘、いづれ玉のやうなる生れ落から疵つけまいと乳母が日傘、さしかけの窓深く育ちたりしも麿くに光る親の慈愛、お待遠よと燕口かゝへて下駄穿くにこゞむ姿の、袖も袂もありあまる家の子見るからゆたかに、手をひき合うて莞爾と笑ふも罪なし、お濱とは其横町の荒物屋が娘にて、親は御恩を受くる美濃屋の嬢様とお筆を呼ぶにも隔てあれど、隔てぬは子供同志年もお濱が唯一月ちがひ、姉さまごツこ鬼ごツこ書はおまへが所で遊んだれば、晩にはわたしの家で飯事をしましよと、鞠にも羽根にもお手玉にも、お四ウざくらの睦じきお七つざくらの仲よしと、自分々々にゆるしの色、あかぬ交りも子供のこととて、ついした事に馴れすぎて偶にはいさかひすれど、物の一時經たぬ間に今啼いた烏がもう笑ひ顔、これ上げうと紙の名も千代の折鶴、取替ゲツこに互の機嫌直りて、雛にも七夕にも筆様濱様と、揃はねば淋し野邊の尾花、まねぎまねがれて十四に近き今日が日まで、稽古所の往復りにも必ず誘ひ合うて離れぬ友垣、姉妹の氣の結び目堅し、うか〳〵と話に實が入りて曲らんとする新道の角に、寐て居たる犬の尾をお筆の蹈みしに、不意なれば犬は驚きてけたゝましく吠ゆるを此方もおなじく不意なれば驚き、路にすべりてあれ〳〵と手を取合ひしまゝ逃惑ふ折、駄菓子屋の店の縁に腰掛け居たるは町内の頭が子、巳之助とて十五六なるが走り來り、エ、この斑めがと小いながらの拳振りあげて逐退け呉れしに、其間にふたりは駈けぬけて遠い所から巳之さん難有うと、振返りつゝ師匠が門の格子戸あけて、あゝ恐かつたといきせき裡に入りぬ。

（二）

「絶えず笑はぬわらんべの
ちくま遊の千代かけて」

喫驚したのと駈上りしお濱が膝から先きへとんと突きて、座敷の口へ投ぐるやうなる辭儀ながらに言ふを、筆様もか何をエと今こまかい一組の濟みしとおぼしく、ちよつと小休みも幸ひに長煙管手にしたまゝ、振向く師匠の年は三十を四つ五つ杉垣の生地あらく、色も香もなみの女の何處と取るべき目鼻ならねど、渡世柄あくぬけたれば見るにうしろ姿は、花千兩のひつか

け帶堅いやうでも堅からぬ蟇が身を助けて、物の本にも稽古所はいつも新道にお誂への格子戸造り、これを畫にすれば竹窓に朝顔時は誰かが吳れし鉢一つ、紅のが明日吟く莟の筆そのまゝ文字兼と呼ばれて、平家の烏帽子源氏の兜唄淨瑠璃にも盛裝あり、宮古路の岐れの末、今が江戸にて流行の常磐津にすぐれて聲美きより、子供を託けるに氣遣ひのない年配、結句師匠は器量の醜いがよし、蜥蜴喰ふではあるまいと遠近に名の聞えて、家筋よき弟子も尠からず、どうも家のは聲が惡いでといへば、何の聲よりは節廻しが此方のは格別で御座ります、わたしが所のはいまだに調子がといへば、それも呑込ひとつ彼方のは聲のよいが一倍お德で御座りますと、遣らず逃さずどちらにも御座りつければ、親はいづれも我子よい氣の盆正月の包物も厚く、これを彈語りの手も口も文字兼がかねし功者、子供へ世辭は親への世辭なり、儂もとお筆は其處なる見臺近く坐りて、恐かつた事はと猶胸撫でて居るを、何處やら笑ひ出しさうな其顏から が讒らしい、過日も路に八百屋の荷が轉覆りて、そこらがお師匠樣の面よと言ひなさるを何かと思へば、痘痕だらけと惡い事ばッかり、又かつぎなさんすナと文字兼のからかへば、それは彼處の若い衆が爾言うて吳れと賴んだ事、ほんとうは今日犬が吠えてと、さすが子供の眞顏になりてお濱の言ふに、賴まれたら此の儂を盜みとも言ひなさらうか、吠えぬ犬はおもちや屋が店へ行かねば御座んすまい、それからと尋ぬればお筆は傍から、巳之さんが來て逐うて吳れましたと、話はそれまでの事前もなし後もなし、おふたりながら明ければ揃つて十四の孃樣娘樣、いつまでか飾るねゝさまの氣で犬一疋恐いやうでは、伊勢屋は角稻荷は隅、あの物は何處にも轉がつて居る江戸の町は歩けませぬ、都合よく居合せた巳之さんとはい組の頭が子の歟、たしか十二の師走おふくろに逝かれて、ここに足掛け五年親父の手一つに育つたなれど、何ぞといへば腦天目懸けて惡口ぶちこむ稼業の荒いに似ず、根からが優しい質れと見えてつひぞ惡あがきしたことなく、眼のくるりとしたるは親に似て親よりも愛嬌あり、色も白し男振もよしあの儘で癖さへ附かずば、刺叉梯子箇纏立派に跡の繼げるは請合、美濃屋樣は親父が出入場なれば、やがて筆樣の代には丁度あれが御贔屓受ける筈と、言ひさして文字兼は三味線引寄せ、撥當てゝ試して尙高いめの二の絃いぢくり居たり。

（三）

「皆なでし子の手を揃へ
優しき聲の張つよく」

さあ浚ひましよと師匠が聲のあらたまればふたりが容もあらたまりて、犬に逐はれしも理の今日は久しぶりの猿曳、儂は持つて來ませなんだとお濱の言ふを、こゝにありますとお筆はおもやひの稽古本徐かにあけて、ならぶや小娘が其文句にもある花靫はなやかに唄ひ出すに、節はお濱がおぼえしまゝを稍ませたれども、質として聲はお筆が美し、稽古了りて左樣ならと出づる格子戸口、紐の垂れしを抱へながらに卷きつくる燕口、又犬が吠えうぞと師匠がからかひ口、三つ寄せて品玉小玉の賣聲おもしろき玉屋があとより、五歩六歩何の氣もなく跟いて行きしが、師匠の詞におゞ氣づきしお筆は不圖立どまり、恐いわ斑が彼處にまだ居て吠えるも知れず、何うせうぞといふ折稽古朋輩の向うより來るをお濱は呼留め、居なんだかと聞けば儂は犬の番は仕ませぬと、あくたい吐いて往過ぐるに猶心元なく、もすこし行つて見ましよとお濱に手を取られて、恐々路四五間歩みし横の路次より、倍大きなる黑のぬつと出でしにソリヤ居たと兩人は飛ぶが如く駈戻りて、あんな事言

ひなさんしたゆゑ、又居ましたと文字兼が家の窓のすだれ越しに靡懸けながら、弱いと見れば噛着くは犬のみならぬ世に、こちらから行くと往復三町餘りの廻り路、あまり遲いに見て來やと出されし迎ひの小僧と行違ひに、晩には屹度と角より別れて兩人は歸りしが、燈の點くを待ちかねて約束は地藏の緣日、さんも行けとお筆は常から嬢様育ちの附人ありて、肩摺るほどに寄添うて連立ちしお濱と路々の話に、こなひだの時菊の簪の白いのはあるゆゑ黄のを買ひしに、又してもお洒落めが同じやうな物を何本も何本も、それを插す頭がお前には幾つある、皆つかへというて遣るお鳥目と思ふか、少しは貯める氣にもなつて、お正月が來たときの足しにしろと、儂が所の阿母さんは口喧しく、全體が甘過ぎると阿父さんまでが叱られたで、今夜はお賽錢上げるばかり何も買はぬのと、何處にか恨みのあるやうにお濱が語れば、翌日見てよどれの知るゝ緣日物を買ふではない、欲しくば何なりとも良いのを宛がうて遣ると母様の言ひなされど、さりとて買うたとて爾は叱りもされませぬとお筆の言ふに、其筈貴女の家は問屋様とてお金もあり、儂が所は小商人の唯せはしないばかり、較べ物にはなりませぬと聞噛りを其儘、それでも店に箱がある、お金のない家があらうかと云はれて、些とは子供が詞にいづれ埒はあらず、おもちやの嚢物賣る店の前に立ちて、あの紋も紫若のかとお濱のさんに問ふを、この人が何知りませうとお筆は笑ひながら振返るうしろに、巳之助の通るを認けて先刻は難有うといへば、何だ斑の事か、あの畜生尻尾を踏まれて喫驚しやがつたから吠えたなれど、ふだんはおとなしい犬どうもするのでないと巳之助は傍へ來て、濱様の帶が解けて居るぜ、おさんめ餘所の子でも同伴のだ、氣を注けて遣れと頭の子は頭の物言、たとへば勇ましの鯉のうみしは鯉の勢ひ、登れば龍吐の振込む筒先、水は名に大江戸の微塵まじり無し、おとならしい事をとおさんが負惜言ふに、べらぼうめ男の十六はもう大人、おやぢの名代にことしの年始はおれが廻つた、これを看ろと縫詰めし袢纏のい組とあるを自慢顔なり。

（四）

「五色いろどる寶船
よい乘合と被來れても」

一緒に行こと誘はるゝまゝ巳之助も同伴になりて、子供同志が袖摺合はす他生の緣日、晴れねばさゝぬ傘も一流太白飴の、斜ひに店出したる角を西河岸へ沿いて曲れば、こゝにも立つや人波油煙は空に漲りて、月に二度が二度變らぬ賑ひ、住むには地藏様も都の事なり、例ものが書來なんだればとお筆の立寄りしは、治に居て亂を忘れず名にのこる長刀酸漿、好くに女の子のあつかひ馴れて、選取りし半ばをお前にもと分けて遣れば、お濱は見取りの直ぐから鳴らしながら、御覽よと隣に指すは古筵一枚大地に敷きて、袖も裾も今はこの世も破れ三味線、音色も貧ゆゑ狂ひてわづかに渡る橋のたもと調子あぶなく、何やら彈いて居る四十あまりの盲女、張上ぐれば上ぐるほど猶ふるふ聲の今宵のみならねど、お筆は殊にあはれにおぼえ往過ぎしものを立戻りて、世にあれば何れは生れしあれも人の身の果、われより幼きが傍に臥したるは手引とおぼし、乞丐せうとて習ひし藝はあることならず、いぢらしのほんの親子か、遣りましよと錢若干取出し、お止しとお濱の竊と囁きて袖曳くを肯かずさんに渡さんとするに四邊に見えねば、これはこの度生捕りましたる鐘太鼓の音からが僞りある看板にだまされて、何處にか長六尺の鼬の口上に足とめて居ることと、今の錢は巳之助に投げさせて見世物小屋の前を、名を呼び呼び索したれど見つからず、この上お

互ひに又はぐれてはと猶眼は配りながら捨てゝ通りに出で、送つて遣らうと巳之助は男の足の前に立ちて、一二町來しころ忘れたとお濱のあわたゞしく云ふを、何ぞと問へばお參りとの事に、忘れるほどのお參りなら何うでもいゝ、溜めて置いて一度にドット拜みなせえ、喰へるでもねえ地藏樣何をお頼み申すのだと、巳之助は歩むにも手の所在なければ、袢纏の裾まくりて頭から被りつ脱ぎつ、それでもお賽錢を貰うて來たものとお濱の當惑げなるに、上げたつもりで飴ん棒でも買ふ事買ふ事と取合はず、ほんとうは家内安全、商賣繁昌を願ふのだと敎はつたれど、儂に欲しい帶のあるを阿母さんが背いて呉れぬゆゑ、それでとお濱はまだ思案三分、とぼけた事を言ひなさんな、呉服屋でもなし仕立屋でもなし、何を地藏樣が拵へて呉れるものか、おれも明日から文久一つ宛三日あげたら、丁度四十五文がとこの帶が出來ようも知れぬと、明かすも正直けなすも正直、路も眞直に來しを幸ひに跡よりさんは追着いて、十六の大人が能う嘲るぞと、巳之助が背をとんと叩きしときは既に美濃屋の門、もう破れたとお筆は其處に酸漿はき棄て、あばよしばよ三人三方、別れておのが家へ歸りぬ。

（五）「おぼこ娘の振袖に浮れてふはと乘物を」

大丈夫斑は居ねえと其翌日も翌々日も、屈託なければ子供同志の馴染むに早く、逢へば必ず一言二言つい三言、それから四言五言いつとはなしの心安げに、やがて六言の向うからも聲懸けて、今日又彼の駄菓子屋の前にめんことやら仕て居ながら、兩人を見て何處へ行くのと云ふに、遲くなつたの此れからお稽古にといへば、師匠の所ならおれも行かう、お待ちと巳之助は立上りてお濱に貰ひし蜜柑の皮剝き、跡から附いて行くに頭の伊三も折々來る事、もとより其子を文字兼の知らぬにあらねば、久しう遊びに來なんだの、見るたび呑附のおとなびて男があがつた、もうめんこでもあるまいといふ傍から、たつた今彼處でとからかひ面にお濱のいふを、又濱樣が默つて居なせえ、彼處でおれが何うしたのだ、言つて見なと巳之助は師匠の傍なる三味線取上げ、おれも習はうかと撥鳴らす音のをかしきに兩人は笑ひ出せば、これでも稽古すれば濱樣ぐらゐには直ぐなるのだ、笑ひなさんなと蔦の子の口の中々まけず、今から稽古所這入は末が案じらるゝ、それよりも木遣一節聽しなと師匠に云はれて、未ほんとに知らねえものと此れには困りて逡巡るを、何だのこゝでハニカミは要らぬ話ほんとに知つて居ようとは此方でも思はず、父さんの眞似して見なと再三强ひらるゝに、强ひらるれば猶ほ出ぬ筈を子供ノ事とて、ふとしく立つる宮柱太からぬほどによいこらさと、喜六彌六に定まりし音頭の端、いたづらしう唄ふを師匠は片頬に笑ひながら聞きて、今によい聲にならうとそやすに、ひやかすから不可ぬと流石赧む顏は子供なり、歸途も巳之助を中に挾みて三人連立つて來しに、文字燒の屋臺を圍み居たる小さいのが認けて、煎つても煎つても煎り切れぬと、男と女なな豆いりの口から先へはじけし灣泊、頰邊につきし蜜擦りながら喚き立つるに、何言やがると巳之助はこらへず振返りて、爾言ふ手前達も豆いりだ、何日も看屋のおたふくと遊んで居るぢやねえか、手前のおふくろは長家評判の鐵棒引、通る者は誰でも路次に立つて居て饒舌りつけ、年が年中豆いりで日が暮れるわと、上には上の吐慣れし毒口、おかまひでないとお濱の引留むる間に、何が恥しさの袂に顏を隱せしこと與、駈けてお筆は先へ往過ぎしが、入來しやいよと呼戻されてお濱の家へ行けば、人は皆障子の奥なるに

命釋はいらず、巳之さんもおいでと店から直ぐの梯子を登れば、二階は兩人が遊び場たれど遊びもなし、可愛い憎いを仕ましよと お濱は硯取出し、取替紙のこれははんばなれば と筋ひきて、お前からと先づ巳之助に取らすれば、可愛いはお筆憎いはお濱、こんな事は面白くねえと巳之助は癖の、そろ〳〵と足投げだしたり。

（六）

「雨に紙ぶけはひとは女子をのぼすかけ詞」

おぼえておいでと横目に巳之助を睨みながら、今度は筆様よと 又新らしくお濱の書いて出すを、お貸しなさいとお筆はみづから筆取り上げ、端から一々印附けしを明けて見れば、可愛いはお師匠さんと其處の仲通に名高き金鈔と、今一つは冥加なれや男巳之助、憎いは又しても犬とお濱、わたしはよく〳〵意地が穢いと見えて、これにまで金鈔が可愛いとさ、可笑しい事とお筆の笑うて看返すを、碎でもないとお濱は矢庭に引奪り、破つてまるめて嚙んで壁に投附け、何うせ儂は憎う御座ります、たんと兩人でおいぢめと仰よし同志遠慮薄く、すねるは一寸の事にも女の兒の遊びの習ひ、手荒く突放したる硯箱の墨の圖らず跳りて、立掛けありし稽古三味線の絃に觸れば、撥ならざれど八當りお濱が容子もおのづからつんと鳴る音、きゝ捨てかねて巳之助は起直り、濱漾でもねえ無理難題、もとがお互ひの遊びにした事根も葉もなし、いぢめるのいぢめぬのと詞の花に實を持つて、ひねくれて出る蔓の胡瓜、苦いが必ず藥とは限らず、斯うして居るに誰彼れは憎い可愛いと、人にもよれ隔ては濱様になければ筆様にもなし、腹を立つがものは何處にもねえと、年嵩だけに賺す理合、もとよりそれは承知の上の言掛りとて、犬と一つに憎まるゝ儂、わからぬは當然腹も立てます吠えもします、お前は筆様が可愛く筆様はお前が可愛し、言合したやうに兩人はそれで氣が濟まうなれど、儂は獨ぼつち仲間に外れて、今日知れたでもない根性曲り、胡瓜の尻尾で御座りましよとお濱の猶突懸かるに、だから面白くねえとおれは一度で止したに、差附けて濱様から仕出した遊び、誰も知つて言つたではなしそれ程腹が立つなら、代りにおれが極々々、もつと極の憎いのにならう、ねえ筆様と振向きてお筆を見れば、癇は濱様がいつもの事とわづかに點頭きしまゝ取合はず、落散らばりし紙の小截れと今の筆とを拾うて、怒らしてお置きと言ひしばかり一心に何やら書いて居るを、馬鹿に頭の細長い姉様と巳之助の覗き込みて言ふに、おもはずお濱も見る氣になりてふつと噴飯せば、巧かろと我ながらお筆も噴飯し巳之助もふきだし、お手本無しに書くが上手と、三人共々顔見合せし高笑ひに忽ち機嫌直りて、忘れしやうなる今のいさくさ、御免よと殊更立ちてお濱のあやまるも尚子供也、明日又とつがへし詞の其の明日も明後日も、こゝに久しく世は廻り舞臺、おなじことに明けおなじことに暮れ、一月二月と經つは夢の如し早う幾つ寐たらと數ふる程なく、改まる暦の上段下段、天地おしなべて春復來れば、自他平等、恵方は何々の間萬よしあしも無し好嫌ひもなし、一つ宛年取るに有無を云はさず、紙鳶に男の兒の勇ましく、羽根に女の兒の賑しく、遅ればせながらと申納むるもあれば、お早々と申返すもありて、御慶の聲も既十日足らず聞きし頃の事、店の長暖簾の蔭に巳之助の佇めるをお筆はちらと視て、羽子板手にしたるまゝ奥より走り出で、莞爾と口よりも目に笑うて立てる姿、初春とて着飾りし衣は綾か錦か、押絵にまさりて唯美しきを巳之助はじろ〳〵と瞻上げながら、こなたには物言はず丁稚の多吉とらへて、頻りに囁き居るは何の用やら。

（七）

「色にや團扇も揚詰の髭が行司にたつか弓」

喃多吉どんと巳之助はやがて其處に蹲踞みて、これ程おれが先刻からあやまるのだ、お前にしても不延喜春早々、ふくれッ面を能とはいへず松竹の手前もある、勘忍するに不動さまも罰は當てまい、元々投げる氣でおれが仕たではなし、雷電だのと取らねえ内の力自慢、お前から仕掛けし相撲、突放すハズミに膝頭へ摺剝疵の些とやそつと、膏藥ほどでもねえこと男なら我慢する筈、それをおれが家へ突然駈け込んでの言告口、血が出たと針を棒、突いたか切つたかのやうにお前は仰々しく言ふが、鰓の腹からでも出る血何の不思議はねえ、見せなせえ今ごろは最う癒つたらう、爾とは知らず親父は眼をむき出し、こゝに槃昌の長暖簾問屋は數あれど、サと一口に通町でも美濃屋樣は大事の出入場、御主人ばかりに辭誼するが分にあらず、よしや丁稚どのと汝と少年同志の事にもせよ、氣を附けるとも疵を附けては濟まぬぞ、粗忽は掩むよりあやまるに恥はねえ、直ぐ行けとあたまから叱られて出て來たおれだ、何日だッけ鄭この往來で何處かの小僧と、お前が撒水の懸つた懸らぬ喧嘩に、持つて居た判取包でこつ〳〵と喰はされて居るを、横から一撃加勢して遣つた事もあるぢやねえか、お願へだおれと一緒に親父の所へ行つて、何とか言つて呉んなせえと繰返し頼みながら、傍なる荷包の紐引抜きてむしり居るに、何だつて芥にするのだと多吉は前垂撲きて、まだ其言草が謔だから勘辨ならず、お互ひに怪我が厭ゆゑ投げッこ無しの角力の約束、待つたと聲を懸けしもかまはず遮に無に組んで、捻倒し、弱い雷電もあるものと兩手を揚げて、これ見やと鳴散らしたが私は無念、成程たんとも出ぬ血おまへは自分のでないゆゑ、不思議はないと言ひなされど、人のを吸つて來た蚊の血でさへ、押潰さるれば悶いて居る、痛い〳〵若浸みようかと湯へも行かず、三年痛いか五年痛いか但しは生涯痛み通すか、何しろこれの癒らぬことには、私は承知でも心が承知せず、店に仕掛けた用もあれば早く歸つて下されと、半起ちかゝりて肯れず、何ぼお前が總菜育ちでもそれはあんまり因業過ぎる、おれの言ふのが謔でお前の言ふのが本統でも、あやまると云ふに文句は罪だ、お前弱味へつけこむ氣かと巳之助の言ふを待たず、おまへの馳走になるではなし總菜でも三度は三度、育ちばかりかお蔭さまで風邪もとんと惹かず、跡であやまつて濟むことなら、私も些投げたいものと多吉は空嘯き居るに、去りもやらず聽居たるお筆は、兩人が詞に大方知りし此場の容子、勘忍しろとあれ程頼まるゝに、意地の惡い何故肯かぬと初めて聲懸ければ、肯かれぬゆゑきかぬので御座います、嬢樣までが此奴ひいきになされば、親からが稼業のとんび凧町内に伸し切つて、何處へも搦む二枚絲强がつてなりませぬ、奥の御用で焼團子買うて歸る往來中、多吉どんと呼留めるを何ぞといへば、串はおまへが貰ふのかと不斷から此奴め、私を馬鹿にするゆゑ斯んな時敵打、頸ねつこを押へて遣ります、と、節々憎らしの多吉が挨拶、どうでもかとお筆の問返すに、ハイと猶勿體振りは丁稚に似ず。

（八）

「未さゝ啼の摺火打石より堅い棒組に」

爾した氣ならと立寄りて念を押絵、ひねくる羽子板の表は吉例春の朝比奈、丁度ことし猿隅のひくや霞まかり出でしひとり立、裏は描くにも薄紅梅の疎き一枝、尚蕾のお筆は指に其畫をなすりながら、儘にもきかれぬ事が少しあれど、多吉おまへは男の常々我强い、きかぬと斷然言つたからは一切肯くな、何と言はれても屹度肯か

ぬがよい、儂はおまへの投げた石が眉間へ當つて、酒屋の勘太泣かせた事も、ちよつとと店の眼を掠めて、屋臺のお汁粉喰べに行つた事も、深川名物かりん糖賣る跡から、眞似して歩いておこられた事も、足元の小皿蹴飛ばして粗忽とはいへ破しながら、知らぬ〳〵とさんに科塗着けた事も、今こそ思ひ知つたるかと身振聲色、物干へお隣の猫たゝき附けて目を廻さした事も、通る小拔摩の杖引奪つて、内の禿がと話す背後へ番頭の來たのを見て、喫驚敗亡駈出す拍子に泥濘へすべり、ふところから燒いた大福の轉げ出た事も、まだ〳〵横着なは奥から過日もおかちん偸んで來て、生の儘お小用場の戸口で嚙つて居た事も、數へれば八つ九つ十六七にもない惡戯、何も彼も一つ殘さず知つて居る、縱令巳之さんの惡いにしても、おまへはこゝへ年季奉公お使ひに出た途、角力取れと誰が命けた、餘所へおまへは告げに行くほどなら、儂も父様へ皆告げて遣りますと言ふに、周章てゝ多吉は袂つかまへ、人惡な孃様のそれほど迄御ぞんじの事、ためて置いて今更告口は酷過ぎます、あがつた種は是非もなし爭ひ立は致しませぬ、唯お免しと嘶されて騷ぐ野狐、まんまと罠に掛りしにお筆は猶首を掉り、告げらるゝ身にはいづれ酷いが當り前、今もお前の言うた通りあやまつて濟むことなら、生餅偸み出して儂も喰べう、告げた所が父様とて、命取るほどの小言もあるまい、安心して居やと弄るに多吉は安心せず、この通り拜みますと掌を合せて、これほど賴みますに何故孃様、きいて下さりませぬと果は恨めしげ、何故とはおまへの肯かぬも何故、儂の言ふ事をきいたらと言ふ尾について、何なりとも此の多吉叶ひますことなら、得てしは輕業逆さに立つて、三度までは梯子段の昇り降りも致しますと言ふに、そんなら先刻から巳之さんのあやまるに、うんと一言當つて碎けるが男の氣性、勘忍せよといへばそりやなりませぬ、譯が違ふといふを違はじ儂もならぬ、それは御無理、儂にも無理と嬲鵡返し、問詰め引詰めの擧句多吉は負け、ヤイ巳之と言ひかけしを尤められて巳之助様、おまへ様は冥加の様孃様のおかげ様、勘辨すればおれも多吉様と口に解けても心が解けず、早うと促されて起つも溢々、晩にしようと再朕がらせに佇む折柄、筆よと呼びしは母のお浦、この子のには老けて年四十に近し、着替へぬかと言ひつゝ奥より出來り、裾が摺るとお筆に敎はりて漸う其處に立上りし巳之助を看て、おゝ巳之か今夜藏開きの咨來、子供は仲の間で雙六歌留多大勢寄つて遊べば、汝も來いといふ傍から、濱様も來るのよとお筆も辭を添へぬ。

（九）

「五つや三つの頃よりも
小弓に小矢を取添へて」

面白からうにといふ内も目を離さぬは吾子の形振、愛らしと人の見るは莨菪柱若較べてのことなれど、親は中々手にも足にも剔られうともかへぬ卞和が玉、抱いたり負んだり一粒種のこれを寶、鬼ケ島やらかち〳〵山やらさては猿蟹が柿の種、八年十年わが子なればぞ飽かぬ夜伽、添寢の床にわれは搖卷の袖着てもこれには冷えさせまい心遣ひ、育てゝからが隻眼にしても、よその子のまんぞくなが疎ましい程のもの、わけて姿の軟れしといへば、三層倍にもおもふ娘が事、わが櫛に齧のほつれをお浦は梳上げ遣りて、店に問さへなくば巳之の相手多吉も入れて遣ろ、たのしき初春の遊びは一人でも多いがよし、枯木も山の賑かなはなさんが頓狂、そつと置くやうにして振れど簀は昔からまゝならず、一か二か三度目に漸と小田原はわしハ一在所、物眞似はいつも外郎賣やがて京へのぼつて、慾もあまれば大津草津、もどかしがる面が可笑しいと、子供へも愛想はこゝの内儀が常、しかし

父さんに聞いてから來い、默つては出まいぞと言捌てゝお筆の手を執れば、巳之さん屹度とお筆は振返りながら連れられて其儘、傘家なれば店と奥と、隔つる霞の網戸ひきしめて影は入りしに、おまへは家の最屑役者晩にする百人一首の、宜べやま風を嵐吉といふ所、旨く遣るのと日送果てゝ多吉は立上り、相撲の仇は歌留多で取る、今の間一寸行つて遣らうと、兩人が仲も遂にこれにて治る御代、遊ぶに正月は子供も忙しく、其夜お濱は早くより來り、芝に出店の旦那が娘御、壓潰したるやうなる顔のも參られ、姑は雙六の世もおなじ旅の宿、人間わづか五十三次何うなるものかの拾鉢が鬪らず當りて、却つて勝を取込む菓子も袋ぐるみ、大きにお筆をおこしと來たと明けて見し多吉が口合、笑ひさざめけど猶巳之助の來らねば、何うした事とお筆は案じ顔、呼んで來ましよとお濱の立つを、夜は女の子の禰は出ぬものと、容の手隙に覗きに來しお浦はとゞめて、一走り多吉行て來やと命くれば、遊びたいに使はれてつひぞ無い事、はいと返辭より尻輕く、駈行きし多吉とともに程なく入來し巳之助何故遲いと皆から問はれて、手前のやうなもの呼んで下さるは難有けれどがらッぱちの此方徒等が稼業に讀書きも碌々させず、殊におふくろの亡い後は野に駒の放し飼、何かと云ふと唯寢轉ぶばかりなれば、減多な所へ出て粗忽でもあつては、此おやぢが濟まぬと出して呉れず、それゆゑと答へは袢纏着る身に、腹掛のつゝみかくしも無し、此處へ〳〵とお筆お濱の呼ぶに何方へも行兼ね、其處に多吉と並びて既崩れし膝を、今出がけに聞きし親父が詞にこゝろづきて坐り直したるが、今度は歌留多とお濱が一旦立ちて播きし札を、おら知らねえと巳之助は下に置くに、儂が仲間にして遣ろとお筆が云へば、そんな猾い事とお濱は諾はず、組にしましよと云ふに、それもよい、濱樣と多吉とは、聞きも了らず多吉どんは厭、勿論儂も厭、これは〳〵と傍に多吉は頭抱へぬ。

（十）

「庭の廣間の喊いくさ　勝てばや戀のにしき鷄」

それだものと撒きかけし歌留多の手にあるをお濱は投出し、自分にも厭なを儂に組めとは、筆も樣とも思はれぬ質の惡い、いづれ巳之さんに限りましよと、見れば只美しき苔の小娘ながら、あるは若枝にも薔薇の刺とてちくりとしたる詞の端に、さすがお筆の爾でなけれどと聲も判然せず、多吉は上手なればとわづかに言ふを、それは大人のいふおためごかし、上手なら猶の事あなたとは主家來、守らうにも攻めうにも都合のよい筈、巳之さんの知らずば教へるに儂でもできるを、貴女とばかり極めるは合點ならずと、勝敗の歌留多に先だつ言葉戰ひ、呼懸けしお濱のいづく迄もと迫詰めるに、喧嘩すまいと折柄お浦の居ねばさんのあつかひて、たとへば此の庭に此の松のあるもよしあし巳之助は何方へもつかず、障らぬは柄に月の出店の娘御と組み、口まめなれば多吉は讀手がてらと定りて、機嫌とともに皆が座も直れば、又賑かに笑の種を撒き直す百人一首、わが衣手の紛らはしき露と雪、ふり行くものと故郷寒くも、書きし字の似つこらしきに間違ひは今一たび、御幸と逢ふことをお手附三枚三番ほどは忽ち濟みて、いつも涙にふくろ背負ひし多吉のかこち顔や、菅家このたびは息もつきあへず二手に分れ、紅葉の錦ちらしとて膝前ませ、和田の原の一聲に漕出づるも早し海士の釣舟、御座りましたと取上ぐるをそれではない、沖津白浪と讀みながらの人に給はるゝもあれば、身を盡してとのみ聞きて、戀渡るべきの末まで聞かず、慥こゝらに逢はんとぞ思ふと、右を左に目を配るもをかしく、我名はまだきと讀むにつれて、人知れずこそ何

處に往きたる、彼處なるは人こそ知らね、此處なるは人に知られて、人をも人づて人の命、人には告げよ人目も草も、いでそよ人々索むるに誰れも見當らず、如何にしたると一順瞻廻したるお濱の心利かして、お筆が袂に掩はれたるを若しやと、手を伸ばすも疾し遅しお筆も認け、ふたり一度に颯と押へて互ひに退かず、これ程探したに無いは不思議、其筥は目もくらやみは公方様とても見えぬ袂の下、匂ふではなけれど嗅當てしは儂とお濱が引張れば、知つてゝ隠して置いたでなし、いきごめば袖の嵐にこゝにも散りし花一ひら、眞先に拾ひしは儂とお筆も引張りて、實に源平なれば景清三保の谷、組まんず勢ひ果てしなきに傍に見かねて、其一枚は除物數には入れまいと多吉の言へど、先刻も先刻兎角面白からねばお濱はきかず、除けたら定めしそちらでは宜からうなれど、こちらで取つたを數に入れぬ歌留多といふは、未例にも儂は知りませぬ、多吉どんおまへには筆様はお主、依怙も贔屓も忠義の内御褒美も出ようが、儂はよそのもの其んな得手勝手は眞平と、年嵩の前も遠慮なく憎まれ口をたゝく疊、ある程の其遊の歌留多引掻散らし、よしねえと巳之助の止めるを排うて立上りたり。

（十一）

「傍からむつと請酒の　なくて七くせ七つ梅」

何うした譯と其とき聲懸けて入來しは子供らも馴染の文字兼、べたつかぬが常からこゝの氣に入なれば、當年も相變らず藏開きの客の取持、今一獻おゝさへおゝさへの御祝儀旁々、旦那衆の前には詞からが遊ばせ上手、きまつて奥へ招かるゝ事なり、あの濱様の恐い顔色、些とぐらゐまゝにならずとも一年に一度の正月、雙六歌留多を一人ですることなければ、皆お互ひに棵葉下に居るに損はなし、うらじろと云はず面白う遊ぶが子供は賢い、春は立つとも腹を立つでは御座んせぬ、これが猫の兒でも御はいがみ合はず、日のあたる南窓福壽草の鉢の傍で、今朝も仲能う儂が所の大屋のは遊んで居た、過ぎにしを稽古する昔から筆様と濱様と、よすぎる程の交情は姉妹には却て無し、他人同志の心安立から偶には喧嘩もあらうが、性は知れしもやしの三つ葉、根を持つほどの事もあるまい、何なりともお兩人の氣の合うたを、一段聽きたいと奥のお客様が御所望、それゆゑ呼びに來た儂の顔というたら、師匠よりは後生願うたがよいかも知れねど、どなたも儂にめんじ、幸ひの事仲直して下され、ねえ濱様語り物は何にしましよと、何や彼や譬へ喩をひく三味の流石師匠、名に書く文字も草書なるべし崩すに角立てず、渡世とて慣れし調子やはらかにいへば、初から儂が我をはるの遊び、喧嘩しようと言うたではなし、今の一枚は除けずとも、濱様のになされと散らばりし歌留多選分けて折れて出る雪の竹軸お筆のおとなしく言ふに、そんならと再坐らう氣のお濱は山々、笑ひたげに見ゆれど行きがかりとて間のわるく、おもひ返せばむしやくしやと子供たがらも肚猶癒えずや、除けうと除けまいと歌留多一枚、いつ迄かそれに執念懸けねど、主ぶる筆様の友達にもない我儘、捌きが氣に入りませぬと疊蹴立てゝ、儂り蹴りますと行くにお浦も出來りて、濱様お待ちと呼留むれど顧みず、明日から喧嘩よの仲戸開放したるまゝ、横町へ曲りても何響く下駄の音、荒らかに馳歸れるに座は白け、意地つぼい兒と跡に文字兼の呟くはお浦の手前、こちらの嬢様に限りますの謎とも知らず、解けかゝりし前垂の紐締直しながら、ほんによと纍妹は合槌をうツかり者、今迄紅居たるお濱と、つれなく見えし別れより、それ出た馬鹿つきはおまへの手元と、教はりてもまごつくに笑ひ聲の又きこえて、もう一遍のお役の巡

取りに其夜は果てしが、捨てゝも置けずと母のいふに翌朝、遣し往ける菓子の猶幾つか足したるをお筆は紙に包みて家にたづね行きしにお濱は居らず、荒物屋とて小買すれば一文が麩糊にも、難有うの世辭ならべながら小錢の剩餘調べ居たるは、お筆が母よりは三つほど年下、噂には氣性も名の通りのお勝、振向きてオヤ筆様、濱は今買物に其處まで參りましたれど、手間のいらぬ事もう直ぐ歸りましよ、お上りなされませと言ふにさらばと、何處のか其糊買の噂衆と入れちがひに敗居跨げば、まあ此處まで、おあたりなされと火鉢にかけし鐵瓶外し、しかも一寸手をあてゝ見て、毎度濱が上りましてと子供ともお勝はぬ待遇、いかさまお濱の嘗て言ひし如く、美濃屋様には御恩のあるらしゝ。

（十二）

「常聞く唄も今の身に思ひ當りし親の慈悲」

頂きますばかりと命縮たがら手に受收めし菓子包を傍なる茶棚の上にお勝は置きて、あなたの父様母様、夜分にもと仰有つて下さいましたなれど、昼も暮もほんの心持うるさいは小商ひとて、床延べて這入つたばかりの表戸割るゝほど敲かれ、夜深けさふけ寒いとは思ひながら商賣冥利、附木一把に起きもせねばなりませず、斯んな所へも何の年取るがめでたいやら、年頭の御祝儀と皺だらけの海苔包一帖でも持つて來らるれば、平生疎遠なのほど詫のひとつも餘計に言うて、屠蘇代りと出した酒は良人のが御ぞんじのなる口ゆゑ、誰の顔見ても儲からぬ儲からぬで、きまつた談話も相手に依つては長びき、かき玉と名ばかりは上品なれど、薄下地の中に泳いで居るやうな吸物拵へるにも、跡仕舞をかけてつい一日は費えます、近間に居てぞんじながらの御無沙汰、お世話になるより外知らぬやうでは御座りますれど、其處にあるいろは和歌貧乏暇無し、どちら様へもあからぬ頭と、起つてうしろの佛壇より取下す鶯餅、老いて猶嚼るに題目撰まず、こゝの主が濱りの一代法華、龍の口より勝の口は出逢ひし者の御難と知るべし、あなたには珍しうもないもの、ありさへすれば濱が口へ、未仕舞はぬを珍しいと思うて、お厭たらずばひとつ召上れ、昨晩もお邪魔致しましてとはお勝の言ひかけしに、切れ目待ちしお筆は内氣の育ち、濱様の昨夜氣に入らず怒つて歸られたれば、行つて來いと今朝母様の言附け、何うなされしと初めて言へば、煙草吸ひの俯くにおのづからかぶさる半天、襟にお勝は手を遣つて直しながら、又してもあれが癇癪、道理こそをかしい昨夜の容子、怒つて歸つたと家では知りませねば、面白かつたらうと云ふに返辭せず、何ぞ語つたかと聞けば知りませぬとのみ、其儘寐てしまひましたに伺へば何うもならぬ子、這ひ這ひが漸との頃から御機嫌を取る砂糖豆、甘過ぎる親父が掌に載せるやうにして仕附けましたれば、かいぐりかいぐりトット言ふ事をきゝませず、傍から儘が一言いへば此頃では直ぐ口返答、あのものとすねし舉句はお定まりのおどし泣、涙でなければならぬ事に思うて居ます、修業とはいへ兄は年季奉公、妹は家で遊藝でもないと人様の思召しませうが、おぼえた事に損は無いと親父が肩入れまして、あゝして置くを何ぞの恩のやうに、お稽古お稽古にかこつけて飛歩き、明けたればこれもう十四あなたと違ふ生活と知らず、手助け一つする氣もなく仲能うして下さるに附入つて、折角呼んで下された歌留多は自分も好の事、外なら知らず貴家へ出て、子供らしうもない氣に入るのの入らぬのと、怒つて濟む事では御座りませぬ、親の眼にもあまる片意地、今に歸りましたらといふ時恰も歸るお濱、只今と裡に入るを見るより、筆様の先刻にから待つて居て下された、聞けば昨夜おまへは腹

立てて、留めらるゝを振切つて歸つたさうの、爾とは知らぬ僊等にまでぶり〳〵と當り散らし、それをよい氣の朝寐髪とくと考へて見や、怒るを可愛がつて下さる美濃屋樣か、これこゝに筆樣から頂いたお菓子、斯うして迄尋ねて下さるを何と思ふぞ、お詫も申せお禮も申せと母の睨めつくるに、しよんぼりと居縮まるお濱はひともと菫、紫の繻袢の襟にうなだれしまゝの顏埋めて、返すに詞崗のあと弱り果てし姿なり。

（十三）

「柳はませた振袖の風にゆらゆら表向」

あのそれはと少時ありてお濱は小き花の脣、開かんとするをあのではない、ふだんから善いも惡いも染めし絲の綯强く、こんがらかつて出るがお前の癖ゆゑ、ちよつとしても意地を結びツ玉、貫く氣でも爾はさゝぬ針の穴、横に卅間は通られず、いづれは拔いて棄つるか、切つて接ぐかの二つに一つ、灸は今こそすゑぬ其足にすゑられし頃の事、折檻も親が情の內あつい味おぼえて居るなら、偶には憶ひ出してみやま櫻、花響が何日まで插され、人の振見てわが枝振若木の間に氣をつけて、些とは自分にも直す料見、持つに髮ばかりが振ではない、動ともすればそれはこれはと、今も尖らした口答へお前等の怒らうとも、何處に誰が蟲ともおぼえず恐がらう、あやまればよい事と疊掛けてお勝は開かせず、傍に見るお筆は氣の毒がりて、詫も禮もあらためては要りませぬ、唯濱樣の怒つてでさへなくば、もとより僊に論は無し、氣の立つは勝負事の習ひ、一言二言昨夜は僊も言うたなれど、これが仇敵の顏背け合ふといふではなく、幼立から互ひに隙てぬふたりが中、何ひとつ今朝となりて肚にのこらず、水にしましよと解け易き春の氷、むすぼれしお濱の此れから屹度と、つれて流れて母の前に手を突くに、纔かに和らぐお勝の面、お遊びとお筆は勸められて登るいつもの二階、今何處へ往つたのとお濱に問へば、紅買ひに通まで、大抵はお父樣が出た序、下村で買つて呉れるのなれど、尙有るとおもひしに切れし間に合せ、焦けて良くないとお濱は文庫取出しながら、あなたのはと問返すに何處のか僊は知らねど、先の番頭の此程は京とやらに在りて、飛脚たのみて送り來し小町紅、徒らに費ふまいと何日も母樣の塗けて下さるとお筆は答へて、御覽よとお濱の出す男人形、又買うて貰うたのと言へば、いゝえ此間淺草の禿の伯父樣、僊へ土產と持つて來て下された、着物は僊が餘所行の羽織の殘り切、阿母樣にねだつて拵へて貰うたれど、帶が來ないゆゑ其儘仕舞つて置くの、ふつくりと口元の愛嬌、誰やらに似てとお濱のいふに、誰にとお筆が手に取りて瞻むるを、巳之さんにと聲に一際お濱は力入れて、爾言へば何處かとお筆のいふを待たず、何處かよりはまる〳〵生寫し、風迄が丁度好し絲鬢奴、巳之さんは貴女のほれて居る男、この人形も可愛がつて遣つて下されとおとなびし口振、搖廻す文庫の底の物ありげに言ふに、濱樣の憎らしい其んな事、巳之さんは家へ出入りの頭が子、おとなしいとて皆が贔屓にすれど、ほれて居るの居ぬのとお稽古の文句ではなし、何んなこと歟子供の譯も知らず母樣の聞かれたら、僊や叱られねばなりませぬ、もう言うて下さるなとお筆は手に持つ人形、下へはおかず猶ほ膝へ置くに、もう言ひませぬ今言ふばかり、叱らるゝも巳之さんゆゑなら苦になるまい、隱しても花は簾越し、容子に知るゝとお濱の押返せば、謹々容子に知るゝはお前こそ、いつぞやも態々袂へ蜜柑入れて……て、途に巳之さんにこれ上げうというたを、……なれば僊は知つて居る、一體何うしたが……と尋ぬるやうなお筆が言葉、それは……考へて、たゞ好

き……くもあらず。

註。點線の部分は此作の載り居れる新聞紙破れ居りて原文不明なり。大凡置いて、一緒、惚れたの、と少し、などやうの意味にてあらべきにや。

（十四）

一嵯峨や御室の花盛り
浮氣な蝶も色かせぐ一

髪結うて貰はねばとお筆は別れて梯子下りながら、後刻に誘ふよと中程に殘す一聲、見れば薄すらと日は元の通りさしたるに、ぽつ〳〵と降出す氣まぐれ雨、風も東側の軒傳うて草履穿ききし子の急ぎ行くに、今朝幾度か鳶の啼いたれば間もなく晴れう、駈けて歸ろとお筆のいふをお勝はとゞめて、傘ひとつ貸さぬと母様の思召すも知れず、美濃屋の嬢様が雨の中駈けるも品わるし、持つておいでなされませ、まだ此れが優しと出すはお濱のなるべし、そんなら今程お稽古の行きがけ、返しますと請けて開けば、小僧どんの序でもあつた時、何の急がうでは御座りませぬ、どうぞ父様母様片様へ宜しうといふを背後に聞きて、さよならとお筆は二足三足不圍用逢ふ巳之助、頭おさへて雨に飛ぶ濡燕、塒貸さうにお筆は呼留め、入れて上げうと言ふ聲きゝつけしお濱、家は角なれば横手の窓推明け、狐の嫁入たんとは降らず、筆様今の事能う似合うてと二階より瞰下すに、あら厭や看上ぐるお筆の何とも知らず恥しく、顔に散るもみぢがさ隱さんとするに風の吹きのけて、颯と袖に一飛沫濡れます色、次第にあかるく空もなりてちぎれし雲の足諸共、わが家の門に行着きしころ、傘つぼめて仰ぐに店から奥へ、おやもうあがる雨なり、正月も暮れ二月も暮れ、やがて謠にすら誰も來る花の三月、酒の名も色盛りの香に醉ふ櫻狩、鳥も歌へ蝶も舞へ世は太平の都の春の光り今がといふに文字兼は例年の事弟子引連れ、豫てより松川菱染めし紋も揃ひの手拭、面に汗をふく風そよ〳〵と麗、かなる日を選みて、けふを一世の曉の粧ひ、小野とはおのが娘の跡から、隨いて行く親の氣に古今一、そとわに歩く小町もあれば、差前おれがの若い衆も在原もどき、光らすなり平前塔合はすに、これ程氣障は神代もきかず、こいつ四文は大きに康秀と、下戸は途から團子の横喰ひ、まるめて頭に吉原かぶり一寸一ぷく煎じ茶の享撰に似たるもあれば、かつぎし檸檬のつのる文句、今に上戸は口駄をまく遍照金剛、足元もよろ〳〵鎧に見立てし手習草紙、洗へど額はつひに黑主、飛んだ目に大伴と醜めて明日呟くもあるべし、老も若きも張交ぜの是れや六歌仙、詞花言葉のつらぬる袂色紙の如し、飄へるはこゝに雲の上野に觀花の催し、お筆も行きお濱も行き、巳之も行けと師匠に伴なはれて、むらがる頭の黑門前に所到るに、上見れば花の山花笑ひ、下見れば人の山人笑ふ、遠きはまねき近きは語る、花も人も賑ひは實に百萬の大都かな、其處なるは何れの殿ぞめぐらしたる幕すこし離れて、文字兼が一連も地に鋪く花毛氈、うしろに遲櫻の今から開く割籠、はしから猪口の迂り遠しと果ては茶碗酒、醉は拳より亂れはじめて、狐に獵人庄屋の日待ちと三味揺き鳴らせば、子供等は山から山を鬼ごッこ、小さ過ぎると除けられし蝶々髷に一片二片、落來る花の木の下逐ひつ逐はれつ、それ筆様が捕まつた、鬼よ〳〵と囃されて逃げそこねしお筆、はにかむは常からの詮方なげに誰をぞ逐はへんとする前にスックリと立跨がれる醉漢一人、これも花見に去來が句の何事ぞ長刀、面も朱鞘の嚴しきにお筆はおびえて、儂はもう拔けますといふ傍近く來し巳之助、代つて遣らうといふを夫れは不可ぬと、隔てたり又もお濱の。

（十五）

「斬込む刀もぎ取つて
落花微塵に八重櫻」

いゝぢやねえかと仕扱きし手拭の兩端兩手に

つかみて、くる〳〵と廻しながら巳之助の言へば、意地強のお濱あとへは緋鹿子の片袖、よりかゝる枝垂櫻のこれも風に花の首ふりて、捕まつて拔けるは鬼ぬけまぬけ、仲よしの筆樣に儂とて代らぬではなけれど、追ふにも逃げるにも上手下手のあるのが可笑しさの鬼ごッこ、お互ひに代り合うていゝ事なら捕ます迄もなし、初めから鬼は誰彼れいはず、巳之さん一人と極めて置いても濟む筈、それが何の面白からうと遮るに、又と口にこそ言はねお筆は避けて、誰やらが手招ぎするまゝに其處を去れば、だから濱樣は嫉ひだ、文句ばかりいふと巳之助も强ひては爭はず、何うせねとお濱も稍〻拍子拔けして、興は是れよべ降りし雨の花、さめて皆散らんとするに傍に老鶯の、師匠が裏の阿婆樣といふが見かねて聲かけ、怒るまい事花も笑ふと和めしに、もとより子供等の遊びたい一心、さらば新規とお筆をも呼入れて復立上れば、おれが鬼と名だりかけし巳之助は胸に一物、ありあけ櫻夕櫻看飽かぬ花の樹間くゞりて縫ふやうに逃げるお濱の跡のみ、わざと逐ひすがりて袖捕へしに、儂ひとりを目の敵今のを意地に持つてか、儂はぬけます、巳之さん代つてと氣取るに早く、ねぢれる枝にも咲かす理窟、つかまれば否應なし誰でも鬼、代つてはならぬとタタ今お前は言つた、おら厭と巳之助のきかぬに猶きかず、言つたとも言つたとも、當り前の事を當り前に言つたに不思議はなけれど、今のはおまへが當り前でなく外の人突退けてまでも、わざと儂を追駈けてと皆まで聞かずに、逃げればいゝと巳之助の言へば、逃げようにもおまへは男儂は女、あゝして懸るに捕まらぬ筈はない、ぬければそれ迄と小娘も嘯く虎尾櫻、ふまへて動かぬに巳之助は塞りて、ぬける奴があるものかと餘儀なきまゝの捨臺詞も、騎りかけし勢ひお濱は捨てず、それでは筆樣は何うしたもの、捕まつてぬけるは儂ひとりか、おまへは筆樣が好きゆゑ頼まれずとも代る氣、嫉ひの儂は頼んでも代つて呉れぬの、ようございます澤山お嫌ひと拗ねし一言、つまらねえ事をと巳之助はあぐみし氣色、そんなら何故儂の代りは厭、どうでも代つて貰はねばと猶せつく折柄、スハヤ喧嘩、逃げよ逃げよと四邊の騒がしきに振返れば、最前の醉漢が幕覗きしに事起りて、言葉戰ひ無益なりいざと引拔きて騎す太刀、何をと幕の内より躍り出でし二三の武士、血氣に逸り洒氣に逸りて切結ぶ太刀の光、見るに子供等の魂も身に副はず、われ先きと驚きおそれて逃惑ふに連れはなし、唯夢の如くお筆は駈けちがふ中をわれも駈けて、一散に三橋まで來てほつと一息、まだも動悸つく胸撫でながら、お師匠さんはとおもはず言ひて伸上るを、分るものかと傍から引戻すに、誰かと見れば巳之助、今迄ひとりはぐれし氣のお筆が、心づけば二人しつかり、手と手を執り合はし居たるなり。

（十六）「綻びかゝる生娘と よい道連のやさ男」

一緒とは知らなんだと執りし手をお筆はわれから密と放し、花も人も盛りの春折角の樂みを、散らすは意地惡の嵐に似たるお侍、儂が前に醉ひし眼をすゑてぬつと立たれし時、嚶とともにぷんと酒の香の鼻を衝きて、能うもあの息に櫻の肢暈せぬこと、恐らしいと見しに案の定、露浮む蜂の憎らしや腰に劍、さすを威しの落花狼藉、拔くより早く切結ぶ影は稲妻、消入るほどに魂のおどろきて何が何やら、今にも殺される氣で一散走り、誰れと手を取るとも知らず足にまかせて、逃げて逃げて儂は漸と此處まで、來て見ればお前もと息は猶はずみながら、おびえし顏色の次第にもとに復りて、頭に手を遣りて暫探るもさすが女や、おら何處へか落つこ

とした、つまらねえと巳之助は額の汗を袂で拭きて、筆様はあの花下蔭少しは離れて居たでよけれど、喫驚したはおれ彼奴が拔いたは直ぐのうしろ、斬られるおぼえはねえと思ひながらも、逃げろ〳〵の人なだれに押倒がされ、見れば筆様のひとりはぐれて、おれがソレ鬼ごっこの時腰掛けて居た切株、躓かうとする所へ起上つて漸う追附き、手を取つて其まゝ一目散、斯んなおッかねえ花見は腮紐切つておら初めて、お互ひに怪我のねえがまだしも仕合せ、師匠は向うへ下りたやうだと言ふに、濱様はと問へば慥一所、こゝに待つて居ても仕方がねえ、前になるか後になるか、いづれ今の太刀風に人足も散る花吹雪、飛んだ遊びが江戸にはある、話の種だ歸らうと促されて、あゝとは答ふれど氣にかかる花の雲、のこるお濱が事師匠が事、何うしたぞと氣遣ふに拂取らず、これから家まで一すぢ路、待つか待たるゝに逢ふも知れずと、言ひつゝ遠かる森の梢見返り勝にお筆の歩むに、向うは五人七人のおとな連れ、そんなに心配したものでもねえ、却つて此方を案じて居よう、どの道歸るなら早いがいゝとすゝめる巳之助、でも濱様がとお筆のいふを、安心なものよ惡ざかしいあの濱様、人の頭を蹴飛ばしてでも、もう歸つたに違えねえ、先刻もあれほど筆様はいぢめられながら、矢張仲よしかと頓着なし、一體が濱様は癇持、ちよつと氣に入らぬと直ぐ怒れど、儂とは手習朋輩稽古朋輩、互ひに癖を知つて見れば、いぢめるのとは儂は思はず、唯このごろお前と儂のとお筆は言ひかけて、あらと懸りしほどにもあらぬ街頭の埃、わざとらしう拂ふ振袖模様の花にうかれて、春は町にも蝶の飛ぶを目送りながら、又兩人斯うして歸る影でも見たなら、捨てゝ行つたと屹度怒るに相違無し、ぢつと看るあの眼が、儂は好きなやうで嫌なやうでと、何處やらまとまらぬ話の本末、打棄つて置きなせえと巳之助のあしらふ間に、既渡る日本橋、新道へ寄らうか寄るまいかと、立ちつくす背後に歸り來しお濱、お揃ひと大きく聲懸けて駈拔けしゝ見も返らず、お筆は急に慶さうと別れて、表と裏と大路小路おのが家〳〵へ時も入相、今ごろは上野の鐘に、かの武士はいかにしたる、唯ひつそりと花の散らうぞ。

（十七）

「むすめ心の一筋も
男ゆゑなら曲り角」

氣をお附けと母は今から餘儀なき用達前掛締替へ、一箇賣は此の口と子供に留守をさしづも倉皇、急げば廻ると小戻りして、阿父様の若其の間に歸られたら、新場迄と言やと言置いて出往きしに、樂みあれば苦みあり、觀花の翌日、唯ひとりお濱が店番がてら、南京玉の赤いの白いの青いの黄の、色々のを交る〳〵絲に通し、指環拵へて居る折柄巳之助の前過ぐるを認け、何處へと呼べば振向きて來て店に腰掛け、お稽古はと聞くに今日は休んだの、今し方筆様の誘ひに來て呉れたれど、留守言附かりたれば出ることならず、昨日はお樂みとくッつけしやうに言ふを、爾いふ濱様も行つたぢやねえか、おればかりがお樂みかと巳之助の片頬に笑へば、ばかりは勿論え、それで言ふの、儂等は三日も前から氣もそらの照々坊主、何うぞと待ちし幸ひの花日和、面白う遊んで居るを邪魔なは武士が長刀、切りつ打つつに花よりも興のちり〳〵ばらばら各自に草臥儲けと呟いて歸る中に、お前ばかりはおさぶらひ様々、あの騒擾ゆゑのお樂みと奥齒に物、鋏下に置きてこれ上げよかと、出て來あがりし指環差出すに、何故よと巳之助は合點ゆかず、其んなおもちゃは入らねえと推返せば、何故とは考へても知れえな事、いらずばおよしおとぼけでない、好きな筆様と餘人交へず、雨に蛙うれしげに手を取合ひ、三人仲よし

の筈の儂まで捨てゝと、いつも末は詰るに落し水、わが田に引きつけてのお濱が怨言、聞く内に巳之助は勃然と面色變りて、何だと濱様、もう一度言つて見なとぢり〳〵と店に躍り上り、兎角お前は物嫉みの悪癖、屹度爾と昨日筆様も言つて居た、捨てるも捨てぬもあの騒動、押さるゝ跡まるゝ蹴らるゝに山に上を下、ごッた返す最中何うなるものか、筆様は親父が出入場のお嬢様、長年ひいきを受けて居れば何ぞの時、おれにしても氣をつけるは當り前、ひとり同伴にはぐれておろ〳〵として居る手を取り、連れて歸つたに好きも嫌ひもねえ、三枚橋で少しはお前を待つたと知らず、あとから來てお揃ひの往來中、駈けぬけながらの憎まれ口引捕へて思つたれど、爾でもねえ町内の兒と扣へたに又してもねぢけ根性、おとなでもある事か子供に似ぬ舌長、おれを二歳の年上とお前は知らぬか、わるく放言くと承知しねえぞと稼業の氣早、詰寄る櫂幕のおそろしきにお濱は喫驚、さほどの心にもなければ跡に退りて、今のは儂がほんの冗談、本氣でもあるやうに巳之さんの恐い顔して、隔てぬ中に偶の言過ぎ、其んなに睨めずとも勘忍〳〵、あやまると言ふに巳之助の面も直り、冗談も品に依る何ぼ子供とて、聞えては外の事と違ひ美濃屋様へ濟まず、二度と言ふな言ふとこれだ、お見舞申すぞと拳の早蕨、突出して店口に片足ぬぎし草履引寄せ、立上らんとする所へ新道より歸るお筆、何うしてと尋ぬるに何でもないのとお濱はつゝめど、遣附けたのだと巳之助はつゝまず、又後刻とひとりは右ひとりは左、殘るひとりは素足のまゝ戸口出で、雙方の後影目送分けて、良久しく敷居の上に立ち居たりぬ。

（十八）

「桃や柳のいたづらに
色香たがひに爭うて」

何だつて氣の早いと目送果てしお濱はやがて裡に入りて、ひろひし絲屑まるめつほぐしつ、舐めしまゝ片端口に片端手、中程を指にて彈くに鳴る音をかしく、しかも何やら瞰詰むるやうなる表に八百屋が聲、來たらばと母が出がけに言附し京菜二三把、お錢は今わからぬと置かせて臺所へ運ぶ程なく、父も母も一足ちがひ歸り來しに、間は僅なれどもまゝならねば籠の鳥、御苦勞といはるゝを子は恩にして、放さるゝより早く飛んで出るを、何處へと問はれて筆様が所へとは、今迄おぼえぬ喧嘩のこのごろ度重れど、さのみとは自分等が心におもはず、清し谷の小川底迄すきすきく幼友達、かき濁すもよどまず直ぐと流れて、互ひの氣々もすむとおぼしゝ塵一點のこらぬ執念、其後も巳之助と折節に逢ふに、何處へ彼處へのいつもの挨拶、胸に障ての雲なければ晴れて洩らす月の笑顔、同じことに日を送りし其年九月、文字兼が秋の溫習とて、夜は男郎花の若い衆が込合へば、いまに一本の女郎花娘ッ子は晝の事、襷も麾く化粧も磨くに、われ落ちにきと語物はかねて師匠の定めて、びら吹上ぐる風に靡うて入來る子供等、待間うつぶく姫百合のしをらしき、垂るゝ前髪そと撫でるの可愛らしき、さては能う饒舌る女の葛、うらみたらしい口桔梗やら刈萱やら、小いのが嚙り着くぺん〳〵草も立交りて、あれ又泣くは鬚もお煙草盆、何處へでも出しやばる癖にと、あちらに一組こちらに一組寄合へば喧すし、年嵩なるが床離れて、順の來る間三人四人窓近く集れるに、連立ちて入來しお筆お濱、つつみし物を師匠が前に置きて其處に加はれば、おめかしと坐るを待たず隅から一言、誰がとお濱がいへば貴女がよと二言、それでも阿母さんがと言葉數次第に殖えて、年は年だけの髪の出來から、縞柄のよしあし下駄のはやりすたり、伯母様に連れられて觀に行きし芝居の噂など、

それ〳〵に點を打紐の解けしも知らず、帶留のくゝりなき話も其身は乘地、このお浚ひから筆様は忙しく、二道かけて裁縫のお稽古とお濱が言ふに、何處へおあがりと聞かれて此先のとお筆が答ふれば、あすこなら此中儂も行きます、初は向うの仕立屋へ行きたれど、店に逐はれて教ふるにぞんざいでならず、先ごろ取りかへると言ふはこの内の年頭、濱様はと尋ねるに儂は未わからず、いづれ少しは習ふのなれど、内で阿母さんが教へて呉れるかと思うてといふを少しどころか唄や三味線より、第一は裁縫をたんと習はねば、お嫁入してからの道が足らぬと、儂の家では阿父さんまでがやかましく、遠からずこゝはさがる筈、あなたとて女の身の早晩御亭主も持たうものと、言聞かせ顔なるにお濱は例のきかぬ氣、お嫁といふが其んなにむづかしくば、儂は行かぬばかりと負けまい迄の減らず口、一生行かぬなら尼かと彼方も默つて居ず、尼でも飾でもおかまひといへば、尼が常磐津は入らぬ修業、ねえ筆様あなたはお嫁に入らつしやらうと言ふ傍から、筆様は物持のひとり娘、お嫁ではないお婿様と今一人が添口、お嫁に行くは仕方なけれど、お婿様の來るは何だか可笑しいやうなと、嫁婿の譯も知らず又ひとりの子の言ふに、それに筆様は婿にはとられず、お嫁に行きたい所がタッタ一つと、いつもの事に仔細げのお濱が言葉、何いふやらとお筆は窓に凭れて、氣にもとめず外ながめ居るを、子丑寅卯辰の次は筆様何、今もそれ其處通つたと背後より搖すぶるに、又濱様がと忽ち振返りてお筆は打つ眞似、其手をお濱のちらと見るより、人に今からかはれしをお筆に當りて、筆様おぶち澤山おぶちと、事あれかしにお濱が咲かす喧嘩の花、根を持ちかけてサアと掛寄りたり。

（十九）

「こなたも胸は篝火と
恠氣の角の橋姫や」

でもお前がと假名書のお筆は優しき係結び、おほかたの天仁波も口の内端娘言葉寡く、そんな事言ひなさんすゆゑと手を引くに、ぶつ眞似睨む眞似は子供が中に珍しからず、常は自分もの事たがら兎角このごろ角目立つ鬼蔦、何をか根に持ちて軒から軒の行掛り、弱いにつけこみ猶掛寄り、其んな事とはと何處までも搦むお濱、巳之さんが事をとお筆のいふを、いつ巳之さんと言ひましたと横に車、おしろいしたる顏あかめて、辰の次は巳よ巳とは必ず巳之さんが事か、納豆屋に明け油屋に暮るゝ郡大路、豆腐屋は日に三度も通ります、何も儂から指したでないに、ほれて居れば見るもの聞くもの、皆巳之さんの事のやうに當推量、これだもの言はなくツてさとお濱が寶詞、又お定りのほれた腫れたと、儂や何んな事やら知りませぬ、何彼に濱様の禰いふから見れば、多分はお前こそと爭はぬ氣にも、こらへかねしお筆が買詞、喧嘩は屋根に烏のすること、彼の年頭のが喙容れて、埋地に霖雨のしたではなし、ほれうと惚れまいと入らぬ穿鑿、子供が身の額に筋、張合ひもないと止むれどお濱は止まらず、いつでも筆様のわが都合に依つては、儂に着綿のまる〳〵くるむ黄菊にも白菊にも、隱すほど顯はるゝ袖の薫、巳之さんの事といへば何差措いてもかばひ立は今春の歌留多でも知れて居る、おもざしの似たと聞いて取上げし男人形、下へも置かず嗜詰めて居たは誰れ、ことによらば儂もほれて居ようか知れねど、相合傘でまだ表も歩かねば、花見の同伴を途へ棄てゝ、兩人手を引合うて先へも歸りませぬ何ぞといふと仲よし仲よしと、それは口先ばかり今では儂より巳之さんでなうては夜も日も明けまい、言うたが筆様には大事の人、勿體なからうが多寡が蔦の子、巳之公と呼ばうにも儂は何でもなし、問屋の嬢様にはよ

い釣合、それで打たるゝなら寧本望、何處からなりともサア筆様、ぶつ氣なればこそ擧げた手、今更引込ますにも及ばず、阿母さんの尺に毎日打たれつゞけの儂の體軀、ぶつて癒ゆる貴女の腹なら、お打ちお打ち存分おぶちと身を摺着くるに、爾ではとばかり跡へ下りて、唯當惑げのお筆が面色、かまはぬ氣の年頭のが暫し傍に覩て居たるも、朋輩の事さすがに捨置き難く、きかぬが憎らしさのお濱を障て、今も連立つて來たほどの兩人が中に、これは又濱様の何うしたもの、筆様のおとなしいを幸ひと突懸かる猪、の牙、むきに喰るに見た所では理のあるやうで、原因は濱様が言出し主、自分の事は棚へあげて、今にも嚙着きさうな其聲からが外聞わるい、縱し誰と彼と仲能うしようとも、自分にさへ痛い痒いがなければと未言了らぬに、餘計なお世話と是れにもお濱は默つて居ず、儂は猪、です喰ります嚙みつきます、突懸かりますといふを其れでは濱様、猶惡いと又一人のなだめんとするに、外聞のわるい奴は彼方へ行くと、衝と立ちてお濱の其處を離るゝ時、筆様、濱様、今度はあなたよとお温習の順來りて、取次ぎて呼ぶにハイとお筆は立上りたれど、衣紋こそそつと直したれお濱は返事もせず。

（二十）

「彼方へ引けば此方へももつれもつるゝ絲柳」

早くよと走るやうなる一聲帶搖上げながら文字兼の促すとき、お筆が姿は既其うしろに立ちたりしも、只今とのみ答へて何して居るやらお濱の來らねば、濱様やと名さして再呼ぶに師匠の前、爾までは拗ねかねてのそりとはせずつかつかと寄來るお濱、儂や筆様と一緒に語るは何故か今日蟲が好かねば、何なりと別の物にして下されと言ふに、又この子がとひそむる眉の文字兼は顏瞻詰めて、どうした風の吹廻す藪から棒、騷き立てゝ何お言ひぞ、今度も筆様と掛合ひ物、將門にしてと自分から極めながら、今更好く好かぬが能うぞ言はるゝ、さては喧嘩してかとお筆をも見返りて、それにしては先刻儂の前へ、ふたり連立ちて來なされたに喧嘩でもあるまい、兎角變へるといふはお温習の延喜もわるし、お互ひに我儘は言はずツこと、文字兼の譯は知らず賺すにお濱は澁々、式程にうなづきて『忍夜戀曲者』、けい古本手に持ちて別々に床に上れど、上れば床の狹きに離れもならず並ぶ奏、おのづから袖重なるを翅と見れば、お筆はほつそりと秋の蝶園に養はれしに品位高く、お濱は稍肥えて春の蝶野に育ちしに趣深し、あゝかうと先刻までは睦じく維がりて、いひ合はしたる髮形すぐに氣も愉ひて、つめて根こ拵つ事もなかりしについ今方、かけし切れの俯けば見ゆるひとりは深紅ひとりは淺黄、爭ひ色の解け合はず結ぼれし心と心、それ五行子にありと云ふと、呶ひ出す兩人がいつになく乘らぬ調子、三味線持ちし文字兼の怪みて傍から心づくれど、雨は連りに古御所ならず顫ふ聲、光國様とわざとお濱の横向きて言へば、偖こそ變化とお筆も亦横向きて言ふに、何とと申しと遂に出合はず、お腹が痛いと矢庭にお濱の飛んでおりしに、文字兼はあきれて手をとゞむれば、儂もと續いてお筆の下りる機會、揑つた揮らぬに復呀返る兩人が喧嘩、呶の間外したで澤山なを未足らぬか儂が肱へぶつかッて、何うする氣と力まかせお濱が突飛ばせば、おもはず蹌けしも其處の幕に縋りてお筆は蹈留まり、今迄は癖とこらへたれど最う堪へぬ、お前が巧らんで外した呶の間、儂からのやうにのめめと謔を此書中、天道様も見ての前で吐くにも程のある、どんな事にも儂は當てたおぼえなけれど、當つた所がたゞの粗忽、口で言へば濟むと突返すに、孃様々々と人のいふを鼻にかけて、小賢しい理

窘詰めそんな事聞く耳を儂は持たず、泣かぬ用心とお濱は磯と一打、生れて父様にとても打たれぬ頭、手出しはお前からとお筆も一打、これはと文字兼の襟懸くる間に兩人は武者振つきて、ほそき手に打ちつ撲きつつねりつ果ては引抓きつ、お筆が髷をお濱の引掴みて放さぬを漸う推分け、何からの起因か儂は知らねど、いつにない兩人の素振節も揃はず調子も合はず、絃の音のとんと合點がならなんだ、暗嘩は兩成敗何方を何うとも儂は言ひません、何せよこゝでは溫習の邪魔仔細はあとでも分らう、筆様か濱様かひとりは先へ最うお歸り、相手が無ければ出來もすまいと、睨み合ひし兩人を隔てゝ割つて入りし師匠が捌き、おちつけば熱さめてお濱はきまりわるげに、では儂はと逃ぐるが如く挨拶して、誰やら明放し置きたるを幸ひの格子戸、突懸けて出でしぼツくり右左は穿替へ、一遍は跡振返り見て扨歸り往けり。

（二十一）

「念ひは同じあすか川　瀨と變行く昨日今日」

人のわるいと跡に残濱と快からぬ子の口々けなすやら誹すやら、あの子にはかなはぬと文字兼も呟けど雙方わが弟子、取分けて徳は笠恩はみの屋が贔屓着ながらも、人の見る溫習の席氣の流石偏りかねて、途で又逢うてもまづい、少しの間あちらで皆と遊んでと其儘、今度の番は年がしらのと共に床に上れば、お筆は纔に點頭きしのみ猶騷ぐ胸さすりて、最前の窓の下くやしさに嚙む袂、こらへし涙紛らすに皆の來て取卷き、今にはじめぬ濱様が月意地、誰とでも喧嘩が病儂も一度や二度でなし、何が其んなに腹の立つやら仲よしの貴女へまで喰つて蒐つて、一月でも遣へば姉様の癖に弱い者いぢめ、あんな憎いのもないものと一人が言へば、ほんとに濱様と云つたら、下手に扱へば燃える燒酎、氣の强いこと此上無し大人にも負けず、いつぞやも新粉屋の店に駈けて來る拍子、自分から撞突つて置きながら、居るが悪いとあくたいもくたい、つけ〳〵と言つた擧句逃際にぷツと掛けし唾、跳つ返りとも何とも儂等にはたとへられぬ、何うして何うしておとなしい貴女なぞの、濱様の傍へ寄られませうか、仲のよかつたが不思議と今ひとりの一廉ぶり、恐らくはこれもわが事は棚の上らしゝ、痛かつたでしよといはれてお筆は頬へ遣る手、さして血のにじむ程にもあらず、斯んなにしてと落つる前髪、元結もぬけしを一人の取上ぐる時、年頭のが語了りて床より降來り、儂がと背後へ廻りて梳上ぐれば、何うにかをさまる鬢の毀れ見よげになりしに、難有うとわれも一寸撫でてみて立上るお筆、言へば儂も叱らるゝ濱様も叱らるゝ、今の事言はずにと文字兼に斷りて、其處までもと年頭のを初め二三人の言ふまゝ、挾まれて共に出でし新道の角多くは其處より曲りたれど、年頭のばかりは送らうといふを、又の日と別れて其先はお筆ひとり、蚯蚓腫れの痕おさふるに頸すこし曲げて、さりとは未解けぬ心に考へながら歩く路筋、夕河岸賣る男の行違ひさま鰡子と高く呼びしに、おどろきて振仰ぐとともに思案は消えし歟、それからの足は早目に歸る我家、それはと坐るより早く母に頬指されて、吹上ぐる風の竹簾どこの家のか、うツかりと通る横顔を摺剝疵、痛みもしませぬと拵へて言ひぬければ、軒下歩くが和女の癖痛まいでも疵は疵、油藥塗けて詰きやと母様はいつも優し、ほつと其處退いて可成は見せず、中庭の縁に出でて詠むる鉢の松は父が祕藏、立てる姿に變れる色のお筆はなかりしも、聞くに晩餐すゝまず常よりはやく寢に就きしと、明けの日は雟婢を供母に連れられ裁縫の弟子入、自然新道への時刻かはりたればお濱に會はず、往かぬ來ぬに四五日經ちし

頃は恰も秋の彼岸、けふは入とお浦は例の事として、できし物多吉に持たせてそれ〳〵配らす序、濱様にもひとつ遣らうぞ、和女行くかと尋ぬるに冠掉るお筆、止してもと言ひたいを母は知らねば、強ひては問はず多吉出し遣りぬ。

（二十二）「緋むくは椿白無垢は福のつぼみのかざ車」

路草喰ふなと目に幾たびか聞馴れし丁稚が耳、今では遊んで來いの合圖とも心得て、へえと其場は恭々しげに下へ手をかけし重包、敷居から一足そとへ出れば直ぐとぶら提げて、あいた片手に米屋の繩簾引張つて叱らるゝにも亦馴れたり、いゝかえと念入れて教へられし口上の半分も傳へず、濱様にと投出すごとく店先へ突附け、折から町の子の竹輪廻しながら來るを見るより、おれにも貸せと引取つて既群に入る多吉、美濃屋様から何か下されたぞと四十餘の男の店にて呼ぶは、治助とてお濱が父此の界隈に名代のお人善し、毎度何うもを口癖に繰返すお勝、このほどの日和に張りし冬物の針の手をとゞめて、重から皿へ明苴蒙る店のおかげ、蓋にうつり紙の折る膝は丁稚にも由く、どうぞ宜しうと出で來しに居らねば、呼ぶに多吉どん多吉どんと二聲許、用は忘れずおいと瀬う多吉の駈寄りしに、このごろは一向筆様のお見えなさらず、何うかなされたでもない御容子、又ちと遊びに入來つてと言へば、其ことづては駄目の皮西瓜の皮、滑つた轉んだの入譏は私が知つて居る、まあ當分は出にくいと何の氣もなく言ふを、今聞くが初めてのお勝は何故よと不審の顏つき、何故でもないといふ時二階より下來しお濱、言ふな言ふなの手を振るに多吉の躊躇へば、早くも見て取りしお勝は振向きさては濱めが又しても喧嘩か、多吉どんお聽かせと問はるゝにわれが火元、今更消しもならず語る始末、つまらぬ事から氣の粟津合戰、鎬を削る詞のはし〳〵宇治か瀬田か、互ひに調子そらしたが破れ小口、どちらが負けても器量よし肌の白旗、血にこそならね蚯蚓腫れの痕押へて、誰も知らぬと云つて實は私も温習の翌日、人にきいた迄委しい事は矢張知らぬと、じろ〳〵とお濱の顏看ながら言棄てゝ衝と逃出し、それからとお勝の問返すころは通のまん中、空包頭へ載せて乙姫さんはの物賣が眞似、何處でか一度は落さねば氣はつかず、濱やと尻目に懸けて入りしお勝の呼ぶに、今に何とか言はれうと心裏に慄へしお濱、おづ〳〵と奥に行けば貰ひし物取分けて、お前に下されたのと出さるゝに少しおちつき、手に取らんとするを何と思うてと不意の一句、さてこそはッと控へて俯く頤、しゃんとしてお聞きと長烟管の先にお勝は支へ、この四五日向うからも見えず此方からも行かず、筆様の筆の字一つ言はぬは可笑しいと儘は思うて居たに、多吉どんが今の話成程相違あるまい、證據にはあの日着せて出した仕立卸し、歸つて脱いだを見るに最う綻びが入つて居た、誰とでもならねど分けて筆様と喧嘩すな、何ぼ子供同志と親御の思惑、度重なれば何うあらうも知れぬと、何彼の合間に言ひきかせたも是迄何遍、外でもない美濃屋様に御恩といふは、利は薄けれど荒物渡世紙も買かねばならず、元手なり代物なり時折は仕入れのお金なり、さのみの不自由もお店ゆゑ手斯らしてお前へ下さるも些とではなし、筆様はあの通り柔和な子、喧嘩と云つてもお前から仕出しては知れて居る、隱し通す氣が子供ながら儘は憎い、それでお前は濟む氣かと詰寄られてお濱は答無し、濱が筆様に疵つけましたとさと、出て來いの催促に店から立ちて來し治助、飛んでもねえと言ひつゝどッかりと火鉢の前に坐るに、お前さんも平氣なものだねと是れにも向くる餘沫、おッかないと近間にて

は言へど、波荒き浮世の海漂ふが皆舟ならば、こゝの楫取りは差詰この女房とおぼし。

（二十三）

「波の鼓もはる秋の
調べに通ふ四つの海」

泣く事はないと廣げし疊紙のまゝお勝は縫物引寄せ、一しづく二しづく涙ぐめるお濱を睨むやうに親遣りて、悲しうて泣くか口惜しうて泣くか、言はれて泣くほどの事何故仕出した、膝に落す露をよすが、おぼえあれば訊ぬるに答へは泣蟲めが、唯めそ〳〵として見せたで果てようか、今から美濃屋様へ飛んで行き、過日は濟みませなんだと店の衆なり奥の方なりへ、一遍通り頭低げて來いと喝し半分懲らし半分、合すればひとりの子の爲と讓る枳殻垣、觸るにとげとげしきも實は藥とかや、何ぞ言はねばならぬやうに聽居る治助の爾しろ〳〵と傍より口添ふるに、子供とて外見あればきまりわるく、理には責められながら今更はいと起ちかぬるお濱、常强い氣もこれには何うも肩すくみて、もぢ〳〵と横直りの足もおのづから引込み、ぢつと復俯きし儘涙に誘はれし鼻液啜り居るを、それ見よお前にしても行きにくからう、好好んであやまり言ふものは世界に無い筈、これからは免さぬに屹度身に徹へて、女は女らしくふツつりと惡戯すな、今こゝくけたら儂が連れて行く、みツともない其顏拭いて待つて居よと叱る内もわが子、やがてお勝は立上りて先へ出るお濱呼留め、ちよつとと帶直し遣るも苦勞の一つ歟、ふたり連立ちて美濃屋の勝手より通るに藏に何やら片附物の今了りしお浦、先程はの禮を些許とうなづきて受け、濱様の姿を暫らく見なんだ、このごろは筆も出ずあちらに居る、行つて御覽といへどお濱は立たず、用なき袂のぞき込みて母の背に添ふに、誠に此れめが飛んだ事致しまして、其お詫にと不取敢お勝のいふを、何事と纍婢に茶侑めさせながら顧みてお筆よとお浦の呼べど、お筆は氣を奥の間の袋戸棚の前、返事しつゝ床柱に隱れて出來らず、あの譯はお浦の未知らぬらしきに言ひそびれしお勝、何うすべきかと稍躊躇ひしも若しもの事、たとふれば忍ぶとも雪の下駄、あとより顯はるれば詮なし新道の濕習の日、濱めが筆様に疵附けましたさうなる始終、多吉どんに聞いた通りを語れば、それは儂も今が初耳さつぱり知らず、何のまあ子供の仕た事態々親御が出て、あやまるの詫びるのと改まつて要らぬ心配、喧嘩は子供に附物儂等が何思ひませうぞ、四日五日往來は絶えうとも何處でか逢へば、すぐと仲直りの早いが結句それも遊びの内、あの日筆が頬に蚯蚓腫れ何うしたと聞きしに、途に簾で摺剝きしと何でもない顏、爾とばかり儂は思うて居た、大概は離れぬ濱様と筆と成程言はれて見れば、此程は一緒でなかつた容子、多吉めが男の癖に入らざるお饒舌、氣を揉ませて濟まなんだ、筆やこゝへおいでと寛ぎしお浦が言葉、纍婢が葦所にて數へし所に依るも、尠くとも恐れ入りますの二十餘りは陳ねて、殊の外恐れ入りしお勝出來るお筆を見るより、濱めが油は十分取つて遣りました、今度ぎり堪忍して何うぞ又元の通り、遊びにも來て下され遊びにも上げますと言ふに、默つて居るのとお浦は執成し、和女の座敷へ連れて往つて、お遊びと鼓に再び友垣の中の破目直りて、前程に捗々しからぬ色の時偶見ゆれど、筆様濱様と互ひに呼交はすに變無し、春は花間の鳥たのしげに笑ふ日、秋は月前の蟲かなしげに泣く夜、繰返し繰返すに休まぬは悼行く駒、友も敵も一つに載せて誰れかまはず、其年も其あくる年も凡そ二年足らず忽ち過ぎぬ。